



才をゆゑ筑波らちをふけをふけ
本より志のまゝとをよりに
既佳境にむねをとするまに
其ある世をさうても人れ
口より秀句とも減一唱三歎
も性ともや智ともけ人も心よ
こも一俳諧の心もひと新し
門人の、ふまふ二帖を清くて
とるまめなまゝとをより
既佳境にむねをとするまに
其ある世をさうても人れ
口より秀句とも減一唱三歎
も性ともや智ともけ人も心よ
こも一俳諧の心もひと新し
門人の、ふまふ二帖を清くて
とるまめなまゝとをより

り、此とに身をゆだね、筑波山はやま
しげ山分入にも、本より志のまゝをし
をりにして、既に佳境に至れり。年ふ
るまゝに其名高く世になりて、こゝら
人の口にある秀句どもは、誠に一唱三
歎に堪ずなむ有ける。此人年比心にこ
めし俳諧の心用ひを、親しき門人のこ
ふによて、二帖に清書して獨言となむ
名付られしをみれば、むべも限りなき
教と成ぬべき玉寶の物とみゆ。されば
予に其趣を、書の始にかいつくべきよ
し申給へど、我まだしらぬ道なれば、
いかほの沼のいかにしてと固辭し侍る
物から、しかまにそむるあながちに聞

すそゆゝくまいたすくわくて
心にまうせゆく物なり

え物し給へれば、せむすべなくて筆に
まかせ侍る物ならし。

以敬齋長伯誌

以敬齋長伯誌

上 言りとひ

「俳諧の道は、あさきに似て深く、やすきに似てつたはりがたし。初心の時は浅きよりふかきに入、至りて後は深きよりあさきに出とか聞し。むかしは人の心すなをにして、初中後を経しかど、今はその修行する人だにすくなく、心皆さきにはしりて、いつしか人もゆるさぬ上手にはなりけらし。これをおもふに、俳諧は只當座の化口にして、根もなきいひ捨草なりと、かろき事におもへるなるべし。是もまた和歌の一跡とか聞時は、かりにも浅く敷おもふべき道にはあらぬを、ほいなき事にぞ侍る。

「大かたの人は口にまかせていひつゞくるを、この道の達者なりと心得て、更に我に益ある事をしらす。俳諧は只まことにもとづく中立なりと、心をよせて修行すべし。たとへば、わかき人の親にいたくいさめられん時、腹だゝしきころの出る事あらば、親といふ前句に子として腹立ちの事を付句に取なをして見侍るべし。全くのりなじみはあらじ。又打枕のよはきをかなしめる心ならば、よくなじむべし。さあれば親にむかひて蜂吹は、神慮にもにくませ給ふ所なりとおそれて、孝心にもとつき、あるは人につかふる身の、慰

「一座におもしろき付句の一二句もつゞき

たらん時、それよりも猶まさりたる句を

せんと、大かたの人は一入ちから入て案じ侍れど、いかにまかるゝとやり句する人まれ也。只よき句をゝと獨り

ゝが案じいらば、しかも能句の出る事かたくや侍らん。さらゝとやりながし

たる跡は、更に能句も出来ぬべし。程よき遺句は未練の人の及ぶ所にはあらず。

「發句は月雪花、木々艸々、其外生る物のたぐひ、すべて何にてもあれ、ひとつ

ゝに物いはせたらんに、かくまでも我事をいひをよほしぬる物かなと、深くよ

ろこびなん心詞にあらざれば、まどすくなくや侍らん。

「付句はのりなじみを專一にすべし。宗祇法師の雜談にも、上手の付句は他人の中

よきがごとし、下手のは、親類の中あしきがごとしと、いひたまひけるとぞ。

「句を作るに、すがた・詞をのみ工みにす

れば、まどすくなし。只心を深く入て、

姿・とばにかゝはらぬこそこのましかれ。古歌にもあれ、古事にもあれ、ひたすら案じ探りて句を作ると、をのづから

心にうかぶ所を用ゆるとの、さかひならんか。

「句は師匠のかたちによく似せて仕習ふべし。修し得たらん後は、そのかたちをは

なれて、天性ひとりゝが得たる風儀をこそ用ひまほしけれ。

「ある人、扱も俳諧はならぬ物にては、といひけるほどに、其ならぬ物と知たまふ

はひとかどの事にて侍る。予は天性數奇て此道にこゝろを盡す事、をよそ四十年

にあまりて、行にも座するにも忘るゝ事なく、臥時はまくらのほとりに硯を置

て、寝ざめだに外なければ、道のなりがたしといふ所を聊わきまふに似たり。平

生深く心をもいれざる人の、ならぬ物と

しり顔にいひたまふこそきこえぬ。

「俳諧をする人、あらましにもいひこなせば、はや得たり顔に止まるあり、無下に

はいなくぞ侍る。或時は句もなりやすきやうにおぼえ、又或時はひたすらなりが

たくもなり侍らん事、幾かはりも有ぬべし。深く入なん人は、其程ゝに功つも

りて、猶むづかしき事を覺侍らん。修行の道に限りあらざれば、至りて止まる奥

もあらじ。只臨終の夕までの修行と知べし。たとへば宗祇法師は連歌の達人に

て、余にならべる人もなしとはいへど、祇公ひとりの上には、今五とせぬ給はゞ

五年の功、十とせながらへたまはゞ十年の功も有つべき事にこそ。

「新しく作りたる句は、やがてふるくなるべし。只とこしなへに古くもならず、又

あたらしくもならぬをこそ、能句とはいひ侍るべくや。作意にのみかゝはりてい

ふ句とまゝを、深く案じ入て、一句のすがた・詞にかゝはらぬとの差別なるべし。

¹歳旦の題に、只の春の句も聞え、また元日やとさへいへば、元日の句なりとのみおもひて、心のよそ／＼しきもおぼし。花の句は花のみをいひ、月の句は月のみいひて、しかも意味深きをよしとす。うはの空に案する人は、句に心にちからなきにまかせて、色／＼の物品を取まじへ、おもひよせて、をのづから工みに作るなるべし。

¹いつはりを除きて、まゝをのみいひのべんとちから入て案じ侍るは、いつはりいふにはまさりたれど、これも又まゝを作りたる細工の句にて侍り。此道を修し得たらん人の、虚實のふたつに力を入ずしていひ出す所、句毎にいつはりなきをこそ、をのづからのまゝとはいひ侍るべ

けれ。是なん常の心に偽りなく、世のあはれをも、深くおもひ入たる故なるべし。

¹いにしへの俳諧は、来る幾日の興行なりと前廣に定置て、詠草に刻付して、再々返までもまはしたれば、句數もいでき侍り。當日に至りて、或は朝飯後よりはじまりたるは、夜半をも越て終り、又晝過てあつまりぬるは、大がた夜もしら／＼と明わたる程にみちぬ。今時の俳諧は再返をだにまはす事まれなりければ、座の上の句數はおほく侍れど、満る所はいにしへの席の三分が一にもたらじ。古人は各沉思して、尤句毎に宗匠の心をうかゞひ、宗匠は又故なき句を取事なし。あるは前句に不便をくはへ、あるはのりなじみを專一に案じ侍りければ、をのづから時のうつりたるなるべし。

¹作意をいひ立たる句は、心なき人の耳にもおもしろしとやおぼえ侍らん。又おも

しろきは句のやまひなりとぞ。修し得たる人の幽玄の句は、修行なき人の耳にはおぼろげにもかよふ事かたかるべし。しかもその詞やすければ、いはゞ誰もいふべき所なりとやおおもひ侍らん。

¹聞えぬといふ句に幽玄と不首尾の差別侍り。まゝを辨へぬ人のさま／＼に句を作りて、是にても未聞え過ておもしろからじとひたぬきに詞をぬきて後には何の事とも聞えぬ句になり侍れど、作者は初一念の趣向をこゝろに忘れ侍らねば、我のみ獨り聞ゆるにまかせて、いひひろむるもかた腹いたし。又幽玄の句はつたなき心をもて、其意味のおもしろきところを聞得ぬなるべし。

¹祈禱の俳諧興行して、いひつらぬる所、句にいつはりおぼきは、いかでか神慮にかなふべき。句毎にまゝを辨へざる人の努／＼おもひ立べき事にあらず、もたい

なきわざにと侍る。御影のかゝりたる座に着ては、各其日の神主なりと心を改め、又御影のかゝらざる席には、心のうちに勸請申て、在がどくつゝしむ人は、

いつはりなき句も出来ぬべしや。

追善懷舊の俳詣も、まともをはこばざる時は、これも佛の道にそむき侍らん。

花の句は一座の宗匠、または功者にゆづりて、努くこのむべからず。貴人・小人などには花を所望しつべき品も侍り。

夫ともに宗匠の言葉をもたずして、外より會釋すべき事にあらず。むかしは月・雪・郭公の類ひは功者の外遠慮しつれど、今時は其わかちをも辨へず、いつしか此道のかたちをとり失ひ侍るもおほし。それより仕習ひたる作者は、斟酌あるべき句のすべをしらず、なげかしき事にぞ侍る。

發句・第三などしたる作者は、花の句を

せざる物のやうにおぼえたるもおかしきこそ。

脇句は文字にてとめ、第三は、に留・にて留・らん留・もなし・はなしなどもとめ侍るとばかりは誰も皆しる事にて侍れど、何故かくは定置たるぞといふ然る所以をしる人まれなり。又脇句のてには

留、第三の文字留、なれや留などいふ事もあり來り侍る。

表の十三句めを月の座、裏にては十一句め月、十三句めを花の座と定侍れど、又月花共に取あげてする時は、何句めにて

もくるしからず。さあれば月花の座とは、何ゆへ定置たるぞといふ事をさへ辨へしらぬ人も侍る。

花は櫻花といふさへ正花にならねば、ましてこと木はいふにも及ばず。しからば何をさして花とはいひけんやと、深く尋ね入べき事にこそ。

鎌倉の右大將、西行上人に弓馬のみちを

たづね給ひし時、馬は大江の千里が、月みればの歌のすがたにて乗たまへと答られければ、ほど拍子を心得たまひて、即座に馬の乗かたをさと給ひけるとぞ。

俳詣にも句のほど拍子は、上手のうへのしわざなるべし。

我句をおもしろく作り侍らんより、きくははるかにいたりがたとしと、古人の詞にも見え侍り。ひたすら修行し侍らん道なるべし。

發句に動くといふ事侍り。たとへば、つばなの句をすみれの句にしていへば、又それにもなり、杜若の句をあやめの句にして見ればなるをこそ、嫌ふ事に侍

れ。余はなぞらへて考ふべし。

心すなをに生れつきたる人も、俳詣にてはたゞそのみいひならひ、かたち實辭なるも、おなじく異形を盡せる人おほ

し。俳諧といふ物はいかなる事を益とはなせるぞと、深く尋ね入なん事もなく、口に出るにまかせていひなぐさむわざなりと、只かろ／＼敷おもひとするは、聊この道を辨へざる故にて侍る。心すなをな

る人、俳諧にていふどくにうそつきて世に交るべきや。又風俗こうたうにしないし

て、世に交る人の衣服に興さむる程の模様をそめ、或はまた羽織袴の上に甲か立烏帽子などを着して人中へ出よといはば出べきや、能く考ふるべし。それ俳諧は和歌のはしなれば、心を種として万づのこの葉となり、目に見えぬ鬼神をも哀とおもはせ、猛きものゝふをもなぐさむる道とこそ聞しか。俳諧を修してまことの道を行侍らば、なさけしらぬ人すら情をしり、あるは不孝不忠の人も不の字をとをさぐべし。只世に交はりて、さしむく所を前句に立て、ひとつ／＼付句に取な

をして考見るべし。前句と付句と肌もあはず、のりなじみのなき時は、是すなをの道にあらじと、たしなみ改むべき事

品あり。心ざし深かりし人の万づに心わたりて、より／＼おもひをける趣向のうちより、求めずして前句にすがりて出たらんを、程よく句に作りてつけなし侍るは、かの道にふける人の歌袋とやらんいふにもひとしかるべし。

人¹とわれと常いふ詞を句に作れば、悉く俳諧なりと辨へしらざる人は、付句の味ひをもしる事かたかるべし。

秀逸の發句といへるは、打きこゆる所何とらへておもしろき事も見えす、只詞すなをにたけ高くして、其意味、口をして

古風もむかしは當風ならし。今はた當風とおぼしき句も、又いつしか古風となり侍らん。古風といふも當風といふも、ともに作り求めたる句のすがたによりて、新古の名はあれど、修し得てまことの道を行けん人の句は、幾とせ經るとも新古の差別はあらじ。只この道に深く心を入

る人の、まれなるこそなげかしけれ。俳諧のわる道に入たる人の、會に連りて前句に心をもはこばず、兼てこしらへ置たる句をもてつけはめたるは、古き鞘に刀を入るゝがごとし。又兼てといふにも

刀を入るゝがごとし。又兼てといふにも

小細工にのみ心止まりて、我とほめし

ん作者は、終に人の句の秀逸を聞得て、たのしむべきさかひにもいらす。もとより身を経ふるまで、一句のぬしともなりなん事かたくや侍らん。

「此道を修し得たらん人に、いつ時代の句を作りてきかせよといはゞ、それ／＼に句のすがたをいひあらはす事やすかるべし。ましてとやうの句は猶更いひやすき事に侍らん。すべて細工にわたる所、むづかしき事にはあらず。只まゝを深くおもひ入て、句のすがたは其時のうまれ次第と、あきらめたらん人の句は、すがたかならず一様ならず。獨吟の俳諧などは、所／＼自然と心かはりて、見るに飽事あらじ。未練の人に、此所をしてきかせよといはゞ、まねても及びがたくや侍らん。一筋にこりかたまりたる作者の獨吟の句は、みづから飽出侍りて、つゝにわが心にもかなふべからず。いはんや人

の聞所をや。作り求たる句はいひやすく、もとめざる句はいひがたからん。その所に心をつけ侍りて、他念なく修行すべし。いひやすき事を是として、いひ及ぼしがたきを非なりと、かたくなに覺たる人には、ほどこしぬべき言葉はあらじ。

「鶯はうぐひす、蛙はかはづと聞ゆるこそをのれ／＼が歌なるべけれ。うぐひすに蛙の聲なく、かはづにうぐひすの囀りなきこそまゝには侍れ。

「俳諧の修行もなくて、心のみ高く止りたる作者は、たとへばたかどの／＼上にのぼりて、四方山をながめつくしたる人の、心ゆう／＼と打晴たりといへるを聞て、我もともに風景を見てんとて、居ながら其所に至らん事をこのめるがどし。ひとつ／＼階をのぼらずして、いかでか高き所に至るべき。此理りをよくわきまへ侍り

て、未練の人はひたすら修行すべき事にぞ侍る。

「未熟にしてわれこそ熟したれとおもへる人は、おろかにぞ侍る。修し得たる覺もなくて、上手になるべき道理はあらじと、我とわが心をさがしてあやまりをしるべし。修行なき人の器用一べんにて、

及ぶべき事にもあらず。又智慧才覺をもて至るべき道にもあらじ。

「俳諧の修行といへるは、ひたすら句にまとの味ひを稽古して、平生人に交るをも、すぐにそのまゝを用ひて、いつはりなき事を、むねと心得たらんをこそいふべけれ。

「我は俳諧を仕習ひてより、いくとせを重ねたりと指をかぞへて、それのみ修行なりとおもへる人は、心得違ひも侍らん。まゝの道にこゝろをよせずして、句のうへをのみひもてあそびたる作者は、た

とひいくとせをふるとも、身の益とはならずや侍らん。

¹俳諧に地・自句・やり句・格外といふ事侍り。地といへるは、さのみおもしろき事にもかゝはらずして、前句によくつけてとをるをいふべし。自句とは、みづからの手くせをもて、おもしろく作りなしたるなるべし。遣句は、其あたり能句のつづきたらん上か、又はむづかしき前句にて付がたき所を、かろ／＼とつけのけ侍りて、程よくやりたるをやいひ侍らん。格外といふは、打きこゆる所更に前句に付よるべき句とも見えねど、底にてよく付侍りて、しかも感深きをいふなるべし。

²百韻の内・地三十三・遣句三十三・自句十七・格外十七・と古人のいひけるは、あながち句の數を其どくにしわけよといふにはあらず。百韻皆つけかた一樣なる

時は、見るに飽なんといへる心なるべし。

³連俳のわかれは、遠く見る時はとをく、近く見る時は脊を合するがどし。たとへば東西にわかれ行人の、一步しける時は袖をならべ、裾をふまへぬれど、東へ行ん西へ行んと心ざしのちがひたる所より、わかるゝといふ名のあるがどし。俳言のつよからん句は、一步よりわかれ行たる人の遠きさかひを隔るたぐひならし。又言葉やすらかにして、打きこゆる所は連歌めきたる句も、心ざす所連歌のいきかたならざるは全く俳諧なるべし。これなん脊合せたる人の東西へ行にひとしかるべしや。あるは又、連歌にいふまじき詞つゞきをもて、俳諧なりといへるたぐひも有ぬべき事にぞ侍る。とかく其一句をとらへて論ぜずんば、又一藥にもいひがたき事なるべし。

⁴俳諧は連歌を元として連歌を忘るべしと古人の詞にも見え侍りしか。

⁵つよき句・よはき句の事。大かたの人は俳言がちにいひて、句のかたちいかめしく作り、或は文字を聲にていふたぐひをのみ、つよき句なりと覺侍る。心得ちがひなるべき歟。たとへば、がさつなる人の喧嘩しける時、其さまさながら勇士に似たれど、底意に死べきまともなく、只人の恐るべき様を作りたれば、死ぬべき場にをよびて逃る事すみやかなるがごとし。又まを深くおもひ入て、すがた・詞柔和に仕立たるを、よはき句なりといへるも又心得違ひなるべしや。たとへば物とがめしける人に行あひて、我にあやまりなき事にも、詞をつくしてやはらかにいひける時は、よはかりしやうに見え侍れど、やむ事を得ざるになりては、一足もさらずして死をきはむるがどし。ま

とすくなかりしをよはき句といひ、ままと深くおもひ入なんをつよき句なりとはいふなるべしや。その虚實をも辨へずして、句のすがた・詞にのみかゝはりて、強弱の沙汰しけん人は未熟にして、ひとへにあやまりなん事にや侍らん。

¹いにしへの俳諧師は、百日の稽古より一日の座功といひて、只會に出なん事を大切に思ひ侍りし。實、山類・水邊・居所の躰用、或は句のいき方・つけかた・さし合等、輪廻の沙汰、其外の詮議までくはしく侍れば、一日の座功も大切な事に侍し。

¹ままと深くおもひ入て言のべたるも、詞よろしからざるはほいなくぞ侍る。心と詞とよく應じたらん句をこそ、このむ所には侍らめ。

¹詞すなをに仕立たらん句を專一なりと、一槩におもふべからず。俳言たくまし

らんにてこそ、はいかいの趣はたち侍るべけれ。

¹宗長法師の雜談に、付句は只前句にはなれて、しかもはなれぬやうに有べし。たとへば蓮の莖を引切て見るべし。はなれやすくして、しかもその糸絶る事なし。其どくに打越のがれ、前句の心を捨るは、蓮のくきを切にとならず。扱縁語をひかへ、寄合をわきばさめるは、糸のつゞきけるがどしと。俳諧にも又ともに信すべき事にこそ。

¹いにしへはいかいの書をあむといへば、國々より發句を書付て撰む人のかたへをくり侍り。其内長點かけたる句を小短冊に書留をきてくは侍りしを、今は初心の作者に至るまで、此句を入べしとて、推して書付をくり侍りき。又興行の俳諧に、一順をまはし侍るも、いにしへは付句を二句づゝして宗匠の心をうか

ひ、其後詠章に書付侍り。今は付句も作者の心ひとつにてきはめ、いづれへうかがふよしもなく、すぐに書付てまはし侍る。かくまで法外の事になりける物かなと、そゞろにかなしく侍る。

¹いにしへは名所などに物をもて付る句は、古歌にても古事にても、慥ならん證據なき句は付させ侍らず。某いまだ廿にもみたざる頃、先師松江の翁と梅花翁と列座の會に出で、

ちよと見には近きも遠し吉野山

といふ前句に、

腰にふくべをさけてぶら／＼

と付侍りければ、吉野山にふくべ、其故有事にやと師のとがめにあひける程に當惑して、先御前句といへど、句前もとをく侍る間、付べきやうあらばその儘付よとひたすら申されける程に、卒爾の事をいひ出けんと、一座の人のおもへるとこ

ろも面目なくて、

みよし野の花の盛をさねとひて

ひさごたづさへ道たどりゆく

といふ古歌にすがりて付侍りきと、當座の作意をもて此歌を拵て答ければ、めづらしく、これは何にある歌にや。と尋ねられける程に、たしか万葉か夫木にて見ゆといひければ、やがて執筆に書せられける。いかなれば師の心をかすめ、かく偽りをもてまたいなくも懷紙をけがしたる咎、かへすゝも道にそむきし事、今はたおそろしくぞ侍る。其外俳諧を只かるき事におもひなしたるうちの句などひとつ／＼かぞへ出さば、無量のあやまりも侍らん。

¹元祿十七年の春、きさらぎのはじめ、或人のもとへ行けるに、床に貫之の像をかけて、發句所望せられし時、折ふし空かき曇てこさめ降ける中に、籬の梅のしろ

く咲て、そこらおぼつかなき程に見え侍りければ、

雨雲の梅を星とも晝ながら

といふ句をつかうまつりぬ。かれこれ案じめぐらしける中に、ふと蟻通の諷をおもひ出して、よき趣向とらへたりとて、取あへず仕立たる句にて侍り。惑説をもち辨へずしてうかと心得たれば、かくあやまりなる句をも仕出し侍りぬ。すべてむづかしき句を案じ入たる時、よき趣向のうかみたるは、日でりに雨得たらんこと、ちして、やがて句に作り侍る事、大かたの人の常にて侍る。其時今一かへし返して、心のうちに吟味有べき事にこそ。

¹いにしへ守武・宗鑑、連歌に對して俳諧を興し、貞徳・立圃・重頼、また中興して専ら世上に此道をひろむ。しかれども其詞かたく、式こまやかにして、初學の人の道に入がたき所をおもひよりて、そ

の後梅翁當風を作りてうたふ。其句の姿・詞、花やかに打くつろぎたれば、人皆おほく古風を捨て、その當風にかたぶき侍りぬ。それより猶さま／＼に移りかはりて、いつしか彼古風をうしなひ侍りき。其古へをしれる人は次第に世をさり侍りて、風儀のうつりかはりし末より學び入たる作者、そのいにしへをしらせれば、法外なる事を法外なりともしらす。或は又今新しとおもひて仕侍る句も、古來いひつくしたる内にありて、古かりし事をも辨へざるたぐひも見え侍る。只句のすがたはいかやうにうつりかはり侍るとも、古格をたづねしりて、心の底に置たらん作者は、をのづから法外の仕かたは、あるまじき事にや侍らむ。

¹それがし八歳に成ける頃いなければなる發句しそめてより、十三歳の頃松江維舟に師のちなみをむすびてかの翁の古風をまな

び、此道に心をいれて不斷獨吟の百韻をつゞり、その頃名に立る古老のかたへ送りて、點をこのみ見る事いく巻といふ其數をしらす。かくて十六歳の頃より梅翁老人の風流花やかに心うつりて、又其當風をいひ習ひ、猶其のりをもこえ侍りて、文字あまり、文字たらず、或は寓言、或は異形さまざまいひちらせし頃、發句・付句によらず、人によしといはれ、我心にもおもしろかりしやうに有けるをも、修行しつる覺もなくてなす所、よき句にて有べきやうはあらじと、ひたすら我心にうたがひを起して、更にこゝろをとどむる事なく、思ふにいにしへよりの俳諧はみな詞たぐみにし、一句のすがたおほくはせちにして、或は色・品をかざるのみにて心淺し。つらくよき哥といふをおもふに、詞に巧みもなく、姿に色・品をかざらず、只さらくとよみな

ながして、しかも其心深し。いにしへより俳諧の發句をおもふに、青柳のまゆかく岸のひたい哉まん丸に出れどながき春日かなうつぶいておどるゆへにやぼんのくぼ山伏はしぶくとかぶれときん柿またその頃當風と聞えし句、摺小木も紅葉しにけり唐がらしこれらはかの宗祇法師の説に、非道・教道・非正道・進正道といへるたぐひ成べし。たゞ俳諧は狂句作意をいふとのみ心得たるばかり、一葉にかたよるべき道にもあらず。猶深き奥もやあらんと、延寶九年の頃より骨髓にとりて、物みな心にそむ事なく、やゝ五とせを経て貞享二年の春、まとの外に俳諧なしとおもひもうけしよりそのかざりたる色・品もか的一句のたくみも、ことごとくうせて、それ／＼は皆そらど／＼なりぬ。

修し得たる人の物がたりを、うつして未熟の人にむかひて、我しり顔にいへるを、力なきひとはそのとばを信じて、げに達人なりとおもふをよろこべる輩は、よこしまのわざにて侍る。及ばぬ道はひたすら修行し侍るべきを、他念心をもこらさず、勞をもついやさずして、只口先をもて上手なりと、人におもはれんとをこのむこゝろこそあさましけれ。

當時もてはやす俳諧の中に、此句を聞給へと語り侍るを、前句は何といふにやと問人あれば、今時前句をたづね給ふは扱も古めかしく侍る。當風は前句などにかゝはる事はずといふ人などもありげに聞ゆ。にが／＼しくこそ侍れ。

いにしへ談林風・伊丹風などいひて、句にさまざま異形をつくせし時節も、更に前句を忘るゝ事なく、或は文字をけうとくあましたる句も侍れど、二句隔る掟を

守らずといふ事なかりし。

いにしへは、一座百韻の俳諧をも句毎に覺て、或は歸りて人にかたり、或は悉く書留などし侍りし。今當風なりといへるは、歌仙の句をだにおぼゆる人なし。

これをおもふに、いにしへは縁語をつたひて付侍れば、一句くおもひ出せばおぼえ侍りし。今は前句に縁語なきを詮なりとおぼえて、作り立たる句にて侍れば、何とらへてもひ出べき種もあらじ。ひとへに前句につかさる咎なるべし。

祝儀の發句はそのことぶきをのべ侍りて、さのみ句のかたちに手柄をこのむべからず。付句はたどいむべき詞に、能く心をはこびてすべし。

同季を付ればよしとのみ心得て、たとへば正月の句に三月の物をつけ、四月の句に六月の物をもて付る作者も侍り。付句はよくごろをはこびて、時節相違なき

やうすにべき事專一なるべし。

戀の詞をさへいへば戀の句なりとおもひて、本情なき句もおほく聞え侍る。詞に戀はうすく侍るとも、心の深からんこそこのむ所に侍れ。しかはあれど、俳諧の修行もなく、心のみたかくとまりて此所を仕侍らば、かへりてひがごにも成侍らんか。

鶯はきく、郭公はまち俺るこそ詮なるべけれ。そのほか四季折くの草木・生類に至るまで、ひとつその物くをとらへて、くはしく所詮を辨へしりて、句にもをよぼしぬべき事にぞ侍る。うぐみすつけたらん句を郭公にいひかへ、梅つけたらんをさくらにいひかへて、前句になじむべしや。物の所詮を辨しりなんこそ第一の事なるべけれ。

春の月は、くれそむるより朧だちて、物たらぬけしき。

夏の月は、灯を遠く置て詠め深し。

秋の月は、窓に、軒に、海に、川に、野に、山に。

冬の月は、一むらの雲の、雨こぼし行隙を照していそがし。

春の雨は、物こもりて淋し。

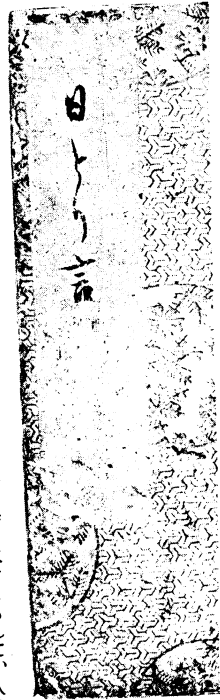
夕立は、氣晴て涼し。

五月雨は、鬱くとさびし。

秋の雨は、底より淋し。

冬の雨は、するどにさびし。

未練の人の俳諧は、春雨のと五文字言いだし時、春雨前に出ゆといへば、秋さめのと付替侍らんといふこそうたてけれ。



とし立かへるあした、去年ことしの雲の引わかるゝ頃、鳥の聲やゝ花やかに、残る灯に鏡立て、妹がころものうらめづらしく粧ひなし、家ゝにかななどいはひ、かはらけとりぐにむつまじく、門には松立ならべ、砂うちまきて、とぶきいひかはす。人の往来も、二日三日までは

ぎの頃は誓願寺に火をともして、人の心をかゝげ、あるはかた山里の折かけ垣に見ゆるもやさし。

常の牛馬の通ひもなくてうらゝかに、あるは庭かまどに手あしさしのべて、うちねぶりなんどしたるもいそがしからず。

室咲は、いつの頃、誰人のまち侘ておもひよりけん、實あたゝかなるを、春にまがへて咲出る花の心こそすなをなれ。

梅は、軒の垂氷のふとぐ敷、冬のこゝちもまだはなれがたきに、一輪のにほひ窓よりこぼれ入て、やゝ春めき、きさら

うぐひすは、聲めづらしき朝より、障子にうつる日影もどやかにおぼえ、きのうつけふ野山もけしきだちて、とちたる水もをのづからながるゝ頃、聲もともによくほだけて、霞に伴ひ花にあそぶ。又青葉が枝に轉る頃はひたすらおしき。

蛙は、水の底にて鳴初るより、上に出て

ね。雨こふ聲もあはれに、旅にあれば古郷の空なつかしく、あるは夜もすがら野になく聲の、枕につたふ寢覺こそたゞならね。

柳は、花よりもなを風情に花あり。水にひかれ風にしがひて、しかも音なく。

夏は笠なふして休らふ人を覆ひ。秋は一葉の水にうかみて風にあゆみ。冬はしぐれにおもしろく、雪にながめ深し。

櫻は、初花より人の心もうきゝ敷、きのふくれ、けふくれ、爰かしこ咲も残らぬ折節は、花もたぬ木の梢ゝもうるはしく、くるれば又あすもこんと契り置しに、雨降もうたてし。とかくして春も末になりゆけば、散つくす世の有様を見つれど、又来る春をたのむもはかなし。あるは遠山さくら、青葉がくれの遅さくら、若葉の花、風情をのゝ一様ならず。櫻は百華に秀て、古今もろ人の風雅の中

下言りとひ

立とす。

「桃の花は、櫻よりよく肥てにこやかなり。」

「梨子の花は、ひそかに面白し。」

「つゝじ・藤・山吹、其外名をもてる物、古歌にすがり古き詞にもたれて、只おもしろしとのみ大かた上にてながむる人おほし。底より詠る人は我心われに道しるべして、まことのおもしろき所に入べし。」

「其感より出たらん發句は、その意味と葉に述る事かたくや侍らん。」

「野につくりくゝと人の見えしは、わか菜つむ頃より草くゝにたはぶれ出て、すみれ・つばなに春おしきまでなるべし。」

「卯月朔日は、櫃くさき衣の袖に手さし入るより、身もかろく氣もひときはかりて覺ゆ。すだれかへらるゝ上さまの事は、はかりてもいひがたし。」

「郭公の頃は誰もみな空に心を置いて、月にあこがれ雨にしたへど、まれにもきかぬ

折ふしは、もし夢のうちにや鳴つらん、

人もや聞つらんと、ねざめくゝをうらみ、又たまさかにも聞つる後は、なをし

たはしく、人の家より文も出て出るをも、いかなる心をやいひをくりけんとうめかし。

「ふかみ草は、ほこりかにうつくしく。」

「芍薬は、すけなきやうにてうつくし。」

「卯の花は、郭公と中よく、あるは月と見て闇をわすれ、雪と見て寒からず。」

「花橘は、あてく敷、おもしろしとも見えす。心のうちにながめはふかし。」

「螢は、ひとつふたつ見え初る軒ば、夜道行草むら、瀬田の奥に舟さし入て、花と見る柳の盛。」

「蟬は、日のつよき程聲くるしげに、夕ぐれは淋し。又山路ゆく折節、梢の聲谷川に落るも涼し。」

「蓮の花は、朝のながめ一入いさぎよく、

晝は又涼し。夕ぐれは心沈む。此華、佛

の物にこゝろうつりてみれば、さかり久しからずして、ちりぎはのもろきもたうとし。猶ふかく賞して観念の奥に至らば、埋れたる佛性、終に忘心の泥をも出づべし。

「涼は、國阿の堂、華頂山の山門、四條紵の床は、心散てさはがし。又かた田舎は樽なんどの下に、晝寝むしろ敷たるものもし。」

「秋立朝は、山のすがた雲のたゝすまひ、本草にわたる風のけしきも、きのふには似ず。心よりおもひなせるにはあらで、をのづから情のうごく所なるべし。」

「七夕の日は、誰もとく起て露とり初るより、あるはその葉をならべ、あるは古き歌を吟じて更に心を起し、あるはまた糸竹をならし、酒にたはぶれ、舟に遊びて、あすにならん事をおしむ。」

「桐の葉は、やすくおちてあはれを告るさま、いづれの木よりもはやし。月のためには、日頃覆へる窓・軒ばも晴やかに見ゆ。」

「朝がほは、はかなき世のとはりをしらしめ、なされしらぬ人すら、佛にむかふ心をこそせば、しほめる夕をこそ此花の心とやいはむ。」

「秋のさかりは、野をわけ入てかひくるゝをもしらす。人の庭に有ては露ふく風に花をおもひ、かたぶく月に佛をおしむ。」

「又花もやがてならんと見る頃の風情こそ、いひしらすおかしけれ。愛する人のまれなるぞうらみには侍る。」

「秋は、むかしより風にしたしみて、そよぐの名あり。」

「薄は、色／＼の花もてる草の中に、ひとり立てかたちつくろはず、かしこからず。心なき人には風情を隠し、心あらん

人には風情を顯はす。只その人の程／＼に見ゆるなるべし。みの笠取もとめて行けん人の、晴間まついのちの程もしらじといひけん、道のこゝろざしはかくおもひ入なんこそ有がたけれ。」

「女郎花は、あさはかながむる時はさのみもあらじ。よりそひてしばし心をうつしめれば、立のきがたし。たとへばすげなき女の情ふかきがどし。又雨の後は、物やおもふとはれ顔にうつぶき、あるは風に狂ひて、くねりなんどしたるけしきは恨るに似たり。」

「中元の日は、蓮葉に飯をもり、鯖といふいをに鯖さし入て生る身をとぶき、親もたらぬ家には鼠尾草に水打そゝぎ、こしかたの有増をおもひ出して、千々のあやまちを悔、或は万づの恵みをしたひて袖さへぬるゝ折節、佛唱ふるよその夕もおもひやらる。」

「次の夕は、火をもて鑪送るはかなし。山には大文字・妙法・舟やうの物、火をさしよする程は、しばしこゝろもうき立侍れど、かたちあらはして、やがて跡なく消るも又はかなき。」

「曙は、かたちより心を狂はせ、心よりかたちにまよふ。わらんべの品よきには、闇たどる親の夜もすがら付まとひ、あるはあらをのこのさま／＼に出立たる、けうとくもおかし。顔つゝみたれば誰ともしらす。見る人にたちよりて、我ぞと人に語りなせそとさゝやきなんどしたるは、しらせ顔にて又おかし。あるは身をさしさがたき女の、帯・帷子など取出して、すがたを人におどらせ見るもやし。」

「虫は、雨しめやかなる日、籬のほとりにおろ／＼鳴出たる、晝さへ物あはれなり。月の夜は月にほこり、闇の夜はやみ

にむれず。あるは野ごしの風に、をのれくが吹送る聲、いつ死ぬべしとも聞えねど、秋かぎる命の程ではかなき。つくねんとして、夜も更、こゝろも沈みて、何にこぼるゝとはしらぬなみだぞおつる。

紅葉の頃は、きのふの雨にけふの梢をおもひ、けふ又あすの時雨をおもふ。時しも空定めなければ、かひ打晴て枝も葉も雫だちたるに、夕日こぼるゝ風情こそ色ことにうるはしけれ。遙に遠山をのぞめば、耳にかよはぬ鹿の聲さへに心うごきて、其里人の目をさましけん夜々の寢覺をおもひ、あるは名にたてる山のあらしはけしき折ふしは、あからめなせそといひけん筏士がつどりの袖も、いつしか錦にかはりて、をのが影さへ底にみゆらん。花は散をいとへど、紅葉はちりてだにながめをのこす。

「鴈は、ひとつく山こえて、跡なく見果る。舟の上にて、古郷のかたに行ちがふ聲。又番ひくならびゆく中に、はしたなる鳥のまじはりたる。いつくの網にか身をうしなひけん、妻の心ぞおもひやらる。」

「鹿は、角ありて、そのかたちいかめしけれど、おそろしき名にもたゝす。あるは紅葉の林にたゝすみ、萩がもとの月にあこがれ、妻をこひ友をしたひて、秋のあはれを聲につかねて鳴ものならし。賢き人の害をさけて友にしけんも、げにさこそあらめ。又齢ひを延るためしは、蒼く、しろく、黒くなん、色をかゆるときけば、鶴龜のめでたき數にも類ふべしや。」

「菊は、霜か花かと見まがふ朝、まち得たる心地ぞする。にほひを万花のしりへにこぼし、風に傲り霜を睨みて、をのれ顔

なる風情、殿上の庭に有ては富るがどく、民家の園にありてはひそめるがどし。世人これを愛してちまたに行かふさま、僧に一日の行脚あり、俗に一日の旅行あり、それが中に、鬢老たる人の目鏡など顔にをしあてゝ、籬のほとりのぞきまはるあり。わかやかなる人は嘲らめど、松柏の契りによせておぼふ。此花ひとり年くくにめづらしきかたちを咲出侍れば、猶いくばくの數つもりけん、千世経べき後の人のながめぞうらやまれ侍る。

「神無月は、春に似てうるはしく、花は櫻が枝にかへりて佛を見するとすれど、其色打かはきてさすがになやめるがどし。夕陽はやくめぐり、夜たけなはにして、空行風枕にこたへ、木葉の雨軒にそぼちて、更に秋の寢ざめをうしなふ。」

「霜は、木草みな枯せど、しろき事花にか

はりて咲がどし。あるはとしくれぬる人のかしらをおかして、後の世のちかき事をしめし、あるは曉おしむきぬへにけらし。又瓦に置ては鬼の顔さへけはひぬれど、行つかぬさまぞおかし。

雪は、音なふして、夜もすがら降ともしらず、常の心に朝戸をしひらけば、そこらみな白妙になりて、木々の梢を埋み、あばらなる賤が軒ばも風情つきて、ふくから雀のつく／＼とならびゐたる、ころもかしたき心地ぞする。又山／＼を見渡しては、旅行人のさぞなるらめとおもひやり、あるは岡野べの松の一むらより、朝げ夕食のけぶりの細く立のぼるも低し。葎は、松にたまらず、竹に聲もろく、地におちては米籾るに似たれば、すゞめ、鶏なんどのまがへて皆を費しけるもわりな見ゆ。消る事は露よりも猶すみやかな

れば、詠めも又ともにいそがし。

氷は、風寒き夜、水の面いつしかとちて、日ごろの月の影も沈めず。朝な／＼日影にうかめる魚のかしらを覆ひ、かへ浪なきとながめけん、志賀の磯邊の捨てぬは、繋がずして行事なく。あるは世を捨人の庵には、算のをとも絶／＼になりて、事たるほどもかよはず、柄杓は桶のうちにゐつて、柄を握れどもうごかず。あるはわらんべの瓶より出しもて遊びては、た／＼音かねのごとく、むかへばまた鏡のどし。とかくして年もきのふにくるゝあした、厚きうすきためさるゝおほん恵みこそ有がたけれ。水無月朔日はこれをはこびて上に奉るとなん。此例は千世万代も消る事なく、めでたき氷なるらん。

千鳥の聲は、沖にたゞよふ舟の中の旅人。戀路にまよふひとり寝の枕。老たる

人のいねがて。すべて耳にかよふ所、心／＼に品かはりて、あはれの數はおほかりけらし。しかのみならず、汐のみち干を告ては、かの武士の髻れをのこし。加茂のかはらの川風には、夜たゞ聲吹流して、もろ人のねぶりを洗ひ。けふもくれぬる聲のうちには、あすしらぬ身のはかなき事にもうつりやすく、黒谷山の念佛ぞしたはる。是なん夜毎に人の心を殺してん、かの鳥のおこせるならし。

火は、爐邊に春をまねきて、窓に鶯の聲なき事を恨み。獨り雨聞閣の中には、夜もすがら灰などせゝりて、やをら心の底をさがし。あるはかゞまる指を補ひては、筆とりて更行鐘のおもひをのべ、あたゝめし衣の化にさめにし心の奥など書つきたるうさには、下にこがれしその頃ぞ子取まはしたる火燵。あはれしらるゝも

のは、老たる人の火桶にもたれて、何おもふらんと見ゆるの。

「果の朔日は、子をもたぬ人だに、我もやがて臼にちなまんなど、ともに打いさみて、隣の餅にとぶきいひかたらひ、妻なき人はむかへん事をおもひて、顔まだしらぬ子孫をしたふ。又都のはづれ、」

此日より姥らといふもの出て門くまよひ、聲さまのぎやうく敷より、人の心も何くれとせはしくぞ覺ゆる。

「節季候は、いつの世よりか初りけん、實春秋のものと見えぬかたちこそおかしけれ。手うちたゝきて拍子よくそろひたるに、物などいそがしく荷ひて庭通りたる人に、問ぬけのしたるもかた腹いたき。

「煤拂ひは、人の顔みな埃におほれて誰とも更に見えわかねば、聲をすがたに呼かはすもおかし。又置所わすれて、日頃た

づぬれ共見えざりし物の、出なんとしたるは、我物ながら拾ひたる心地ぞする。

「餅突は家く其日をたがへず、けふはあすはと親しき人く行かはして、とりく賑ふ中に、老たる女の例しり顔に下知なんどしたる家は、物こもりてみゆ。又おさなき人の柳が枝に餅むしりつけて、花と見るよろこびこそ、其むかし戀しくは侍れ。

「としの内にも春たつといへば、日影もをのづから打のどめきて、口もほどけぬうぐひすのおろく鳴出るぞ、折知顔にてやさし。人みなえ方に棚打わし、くれ初れば新しきかはらけならべて、灯にぎやかにかゝけたて、目にさへ見えぬ鬼にむかひて、豆うつ人のつこと聲出せるにぞ、いづくかすみかなるらんとおぼゆ。又老らくのひとつゝかぞふる豆の、手にさへあまる齡ひこそめでたけれ。門に

はやくはらひといふものゝ、よぶかたに立よりて、例のとぶき一口にいひながして、又はしりまはる心の内ぞせはしき。年もみなとに漕よする寶舟には、誰も皆いねつみたる眠りのうちこそたのしけれ。

「とせもはやけふのみにくれよする日、世のわざしげき人すら、爰かしこはしりまどふさま、しれる人に行かふだに、纔に半面を笑ひて物さへいはず、心みな常の所にをかざれば、むかふる人に行あたりて、もてる物のそむけるをも辨へずして、ひとつふたつ言あへるもあり。又かたはらには、いかにしてわが足踏でんやととがめ出たるよりと葉廣がり、手をしまくり、いかりのゝしりなんどして、時のうつるをだにわするゝもけうとし。家く松竹植ならべ、しめ縄とりつけて、例のくさくさがりたるにぞ、事い

そがしき中にもけしき立て、春をそげに
みゆ。又むつまじきかぎりは大暮のこぶ
き行かはし、あるは又をけら求むる神の
處には、鈴ふる袖も實なまめかし。風の
けしきも猶更過るに、化口いひあへる八
坂の奥こそ、むかしおぼえてそとろにた
うとく侍れ。手毎に火繩かひふりて、い
さみもて歸るは、あすの甕を賑しそめん
とならし。人の往來もやゝ絶／＼に、閑
のともし火に枕うちかたぶけて、春秋の
あらましをおもひかへし、又逢べきけふ
にもあらじと、かぎりなく名残しらるゝ
折節、明なば袖さゝんとかさね置たる衣
のにはやかなるにぞ、心もやがて花には
なりける。

旅

「門出したらん日、行く人どまる人とも
に打いさみねれど、見送り見かへりなん

どしたるは、心になふいのちならば
と、相おもふほどこそわりなけれ。任な
れし里の木立は行にまかせて梢をかく
し、跡しら雲の八重にかさなりては、め
なれし山も埋みぬれば、心へだつたとお
もふばかりこそかなしけれ。春はもろ鳥
の囀に物なつかしく、あるは遠山のしろ
く見ゆるをも、雲か花かと心をつくし。

夏は郭公の一聲に雲の行衛をしたひ、あ
るは木蔭に立休らひては、汗吹風に袂を
なくさめ、清水ながるゝ道の邊には心を
すゞしめて時をうつす。秋は又名もしら
ぬ草ゝに花をむすびて、遠かりし野路澤
邊をだに、いつ行としもなく過ぬ。ある
は又夕日程なくかたぶく時は、やどるべ
きかたもおぼつかなくて、野にゐる人に
打むかひて、道の程たづねなんどしたる
に、遠くいひなしたるはにくし。時雨の頃
は笠の雫も定なくて、日影ながらに身打

ぬるゝこそうき物なれ。雪はなをつらく
もふる物ながら、木ゝの梢しろ妙になり
ぬる時は、吉野・初瀬のこしかたをおもひ
出して、旅の心を慰みけらし。晝の程は
まぎるゝ事もおほかりけれど、なじみな
き枕に夜ゝの寝ざめをかぞへみれば、あ
るはきぬたの音・更行鐘・川の瀬のをと・
千鳥の聲・海ちかきやどの磯打浪の聲・
風の氣色も更て行雁がね・雨しめやかな
る軒の雫・かたすみにて綿つむぐ音・上
手に申念佛の音聲・さも侘しげなる犬の
長吠。はる／＼來てはやどりかはらぬ空
の星さへ、影あはれにおぼえ、何につけて
も古郷の便のみおぼつかなくて、人やり
ならぬ道をうらむる折ふし、我國人のか
へるにあひては、文たのまんと筆とりた
れど、またせて時うつすべくもあらねば、
心の程あらましにも書とりがたくて、物
にもなやまで爰までは來ぬる、とばかり

かひしたゝめて、やがて又わかれ行こそ
ほいなけれ。なを行くて心あてなる國
に入ては、きのふけふのゝしかりし
も、人の心に鬼なれば、いつしかなじ
み付ておもしろき事。おかしき事にふれ
ては、人なみに興を催すにも、古郷の事
の民心の底に有ければ、慰むわざもみじ
かく盡ぬ。又かへるさにもむきては、
ひと日く國のちかくなるにまかせて、
なをとけしなきに、道をそき馬やとひた
る程、腹だゝしき物はあらじ。やうくか
へり着なんとしける日、我岡のべの木立
なんと見え初るこそうれしけれ。笠破
れ、杖みじかく、色さへ黒ふ、おも瘦、
麻の小衣うちしほれたるに、つま子出む
かひて、とぶきいひあへる中に、なみだ
ぐみなんどしたるは、いつかはとおもひ
しだにまち得たるうれしさ、あるはうか
らん旅のあらましなどをしはかりての心

ならめ。童僕よろこびむかへ稚子門にま
つといひけん心の程は、國こそかはれ。
しばしが内は夜の寢覺も旅のこゝちに
まどひぬるを、窓・天井より心づきて
は、我宿なりとおぼゆる程にぞ有ける。
又悔しかりしは、日ごろしたひたる名ど
ころだに、或時は雨にさへられ、あるは日
うちかたぶきて泊りをいそぎ、歸さには
かならず立よらんとおもひて過ぬるを
も、古郷のかたに打むきては、一足をだ
に費しがたくて、又来べき折もあらめと
見残したりしも、終に行べきさすがもな
くて、としふりなんどしたる後の心こそ
口惜けれ。

戀

心は法界にして無量なる物ながら、一念
まよふ所は、大河の水の纒なる塵によど
むがどし。さればまだみぬ人をも風の便

に聞しより、などや忘れがたく思ひ、或
は筆のかたちを見ては、やさしからん心
をしたひ、あるは声垣のまぢかきあたり
に休らふ折ふし、きよらかなる物ごしを
聞ては、水などこひよりてすがた見むよ
すがを求め、あるは又道行ぶりに、しと
み格子のうちより顔さし出したるを見て
は、ほとりの家に立よりて商ふ物の價な
んど尋て、よそながらかの家の名をとひ
て過るもあり。あるは花見る頃ほひ、あ
るは又神に佛に詣めく日、色よき女の出
立たる中に、かりそめにおもひかけて
は、添よるべき便もがなと思ふ折ふし、
俄なる村雨なんどしければ、傘のやどり
をもてより、あるは又火繩たつ物さし出
してうつしもらひ、或は近きかたの道を
しへなんどしたるも、こゝろづくしのは
しなりけらし。それが中に、うしろすがた
人にすぐれたるを見て、爰かしこつきま

改

未定日業

古曰詩經變爲楚辭，楚辭變爲唐律也。我國和歌有長歌短歌、旋頭歌、泊連歌、誹諧也。乃隨世變也。如誹諧自本歌若論之則野也。然其實不野也。今鬼貫誹諧非野語，乃實語也。淵明詩有達磨骨髓，則誹諧亦入其妙處，則蓋到古人和歌佳境，其可得乎。余閱鬼貫獨語集，其詞絕妙而有味焉。我以謂連歌宗祇宗，長得妙誹諧，鬼貫獨得妙言者乎。勉旃。

享保戊戌佛誕生日

紫野巨妙子書子清源南軒



能書目錄

- 一 能譜新式 全部一冊 鷺水選
- 一 同掲り言 日 二冊 鬼貫著
- 一 増補番匠童 日 一冊 和及述
- 一 能譜袖かんか 日 一冊 芦中作
- 一 能譜ききり百句 日 二冊 匠人選
- 一 能譜わろかきり 日 三冊 子梅述
- 一 能譜ききり 日 二冊 鷺水選
- 一 能林良枝 日 三冊 日撰
- 一 能譜ききり之白尾 日 二冊

建仁寺町四条下二丁目加賀屋

京都書林華文軒

中西外各衛藏版